



TITLE:

我が學界に望ましき事ども(其の二)

AUTHOR(S):

CITATION:

我が學界に望ましき事ども(其の二). 天界 1930, 10(112): 265-266

ISSUE DATE:

1930-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161553>

RIGHT:

天 界

第百十二號 (第十卷) 昭和五年八月

我が學界に望ましき事ども (其の二)

(卷 頭 言)

わが日本國を、世界的な立場から見た 地理的位置は、天文學研究上、甚だ重要なものであることを、吾人は今までにも繰り返し人に訴へた。地球世界が球形であるため、如何なる天文臺も、一時的に、又は、永久的に、或る一部の天空から遮られてゐる。即ち、換言詳述すれば、北半球各地では南の極天を永久に見ることが出來ず、南半球からも同様に北極附近は見えない範圍にあるし、又、東西遠く相離れた二地では同時に 同一の天體を見得ない。従つて、一定の經緯度に據る一個の天文臺は、單に其の地表的位置の故のみからしても全世界の天文同攻者のために輕からざる 責任を負つてゐるわけである。わが日本を見るに、西へ、歐洲の文化中心地と八九時間の時差を持ち、東へ、北米の西境とさへ七時間の時差を持つてゐる。従つて、わが國の天文臺が晴れた天空を凝視しつゝある時、其等の天體は殆んど總て歐米の觀測者の視界外にある時である。こんな事情であるから、邦國の天文家が特に重責の任に置かれてゐることは言ふまでもないが、又、之れを他の一面から見れば、同じ理由の下に、わが國の觀測者の 研究成績は普通以上の價值を以つて歡迎せられる地位にある。

然らば、現實に我が日本の天文研究設備は如何と言へば、過去 數年來、研究者の増加と共に、著しく進展して來たとはいへ、上記の世界的地位と責任とを思ふ時、尙ほ大々的に改善發達せしむべき餘地が頗る多い。今怙く、我が國に現存する 望遠鏡の多くが如何に現代の學的進況から無視されたものであるかの事狀を言はないとするも、尙ほ、天文臺の數と 其の分布

の狀態に於いて完全に時代を愚弄する觀を呈してゐる有様は遺憾に堪えない。試みに地圖を開いて見るに、我が國領は東西三十六度を超ゆる經度範圍と、南北亦三十度に近い緯度差とを含み、殊に此の中には地理的及び氣象的變種のあらゆる相を持つてゐる。所謂日本内地に居るものにこそ梅雨其他の障害があるけれど、滿洲や北海の地あたりでは可なり確實な天氣圈を與へられてゐるわけであるし、又、臺灣では遠く極南の銀河を殆んど見盡し得るほどの低緯度を與へられてゐる。此等の事情は、米露の如き廣大地域を占有してゐる國々でさへ及ばざる程の勢であるに拘らず、現在の我が國の天文臺は、東京（三鷹）と京都（花山）とにのみ全力を集中してゐるかと見え、之れに尙ほ水澤や倉敷の如きを併せ考へてさへ、結局、天與の好適地が殆んど今は全く天文學的に顧みられてゐない有様である。我國學術界の恨事であると同時に、又之れは世界のための恨事でなければならない。望むらくは、近き將來に於いて、今日可なり普く行きわたつた國立の最高學府に各々適當なる天文研究設備が作られると共に、遠く鮮滿はた南洋諸島にまでも之等の設備が設けられて、政權乃至軍威よりも寧ろ高尚崇高な學術文化の力により、國內國外共に我が民族の發展を誇示し得る日の早からんことを！ 若し、識者にして「東京へ」「京都へ」總てを集中するの迷夢から醒めないならば、そは例へば「パリへ」總てが吸引され行く佛國の惡例に習ふと等しく、あたは我が學界は世界の期待から反き去る運命にあるものと斷言せざるを得ないこととなる。權威者の熟考を促す所以である。

天 文 學 大 講 習 會

1. 日 時 昭和5年8月17日午前8時から【4日間】

1. 場 所 岡山縣倉敷市大原農業研究所講堂

1. 題 目 及び 講 師

1. 實 際 天 文 學

2. 大 熊 星 座 と 小 熊 星 座

3. 天 體 觀 測

理學博士 山 本 一 清

倉敷天文臺主事 水 野 千 里

{ 理學博士 山 本 一 清

{ 理 學 士 宮 原 千 里

{ 主 事 水 野 千 里

1. 會費金2圓也 但シ天文同好會員は金1圓50錢也

1. 申込期日 昭和5年8月10日

1. 申 込 所 岡山市門田21番地

天文同好會岡山支部幹事 水 野 千 里 宛

昭和5年7月

主 催 天 文 同 好 會 倉 敷 天 文 臺